

海外の大学アート・リソース事例①-2

Australian Ceramics Triennale 09

佐藤 ちさと

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻2年

シドニーで開催された Australian Ceramics Triennale09 は30周年を迎えた。会議やデモンストレーションが行われる National Art Schoolをはじめ、トリエンナーレの開催に合わせ数多くのギャラリーや芸術大学が Ceramicの企画展を催し、街全体でトリエンナーレを盛り上げていた。参加国は日本、韓国、中国、台湾、オーストラリア、アメリカ、イギリス、オーストリア、パキスタン、スウェーデン、ポーランドの11カ国で、それぞれの国からカンファレンスの講演者や出品者が参加していた。トリエンナーレ関連企画は6月から既に始まっていたが、会議などメインとなる催しは、7月16日から20日で行われた。(一部ワークショップが13日から16日の4日間の日程で行われていた。)トリエンナーレの情報は、専用HPの他、参加料を支払い、講演者のインタビュー、会議やギャラリーの企画等トリエンナーレに関する情報の掲載された冊子、リーフレット、ギャラリーマップ等たくさんの資料を貰うことで得ることが出来た。またトリエンナーレに際し企画展示をしている画廊を回るバスツアーへの参加も可能となった。5日間の日程のうち、16日はバスツアーが企画され、計2台のバスがそれぞれ別々のコースで画廊を回った。シドニー近郊の画廊での企画展示は全部で48個。オーストラリアの作家を中心として、アジアや欧米の作家たちの作品が展示された。シドニー近郊といっても範囲は広く、また画廊の数も多いため、初日のバスツアーで予めセレクトされた場所を効率よく見て回れたことは参加者にとって親切で、内容も濃く充実したものであった。残りの4日間 National Art Schoolで計93個の会議と、30個のデモンストレーションが行われた。National Art Schoolの建物のうち、Cell Box, Black lecture theater, Red lecture theater が会議の会場、Studio1が学生作品の展示、Studio2,3, Bilding25-1,2,3がデモンストレーションの会場として機能していた。また屋外を利用し庭にテントを張りデモンストレーションを行っている場所もあった。

会議は約20分から30分程度で、スライドや映像

を用いて講演が行われたあとに、会場の聴講者と講演者として質疑応答が交わされた。聴講者は積極的に個々の意見を発言しており、会場全体が一体となってディスカッションし盛り上がっていた。デモンストレーションは一つの場所で一人が行っている場合と、一つの場所で2~3人が同時にデモンストレーションを行っている場所があり、作家は1日から2日間で制作をし、焼成をする手前までの成形過程を見せていた。観覧者は各々自分が見たい作家のデモンストレーションに参加し、成形等について質問をすることができた。

会議とデモンストレーションはいくつもの会場で同時に行われていたため興味のあるものが時間帯で重なってしまうこともあり、その点で短い日程で会議が行われる難しさを感じた。しかしまた、各国から参加していた多くの作家の意見や制作の様子を短期間で見て聞くことができたことは大変貴重であり、有意義な経験であった。

5日間会議は続いたが、毎日その日の最後には、大学やギャラリーで celebration, party などイベントが用意されており、作家と一般参加者が一同に会する規模の大きなものであった。お酒や料理が用意された和やかな雰囲気の中で、会議の講演者、作家、一般の参加者が、国境を越えて対等に会話を交わすことが出来た。

特に欧米、豪州の作家たちは作品をつくるだけでなくプレゼンテーション、つまり人に伝えることを強く意識している。今回大規模な国際交流の場を体験したことで、Ceramicという世界共通の表現素材を通じ、日本における制作を国内に留めず作家自ら世界に向けて発信し繋げていけるような能力を身につける必要があることを強く感じた。作家として「よい作品」をつくることは勿論、その「よさ」をいかに他者に伝えるかというところでも個々人の技量が問われる。それをデモンストレーションや講演も含め体験できた事は貴重な経験であり、今後自身の作家活動に活きるものとなるだろう。

海外の大学アート・リソース事例①-3

YOUNG GUNS Exhibition

藤崎 佐保里

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻2年

2009年7月15日から30日の3週間に渡り、シドニー大学 Sydney College of the Arts(SCA)のメインギャラリーにて、世界の陶磁教育を行っている美術系大学を卒業した学生による現代陶磁作品の国際的な調査展示 YOUNG GUNS Exhibitionが行われた。この展覧会は同時期に開催された Australian Ceramics Triennale 09のイベントの一環として企画され、オーストラリア、オーストリア、日本、台湾、韓国、イギリス、アメリカから、美術、デザインを学んだ学部卒業から2～5年以内の作家が出品した。

Jan Guy先生(以降 Jan先生)を中心とする YOUNG GUNS Exhibitionの企画はオーストラリアの陶磁の現状を考えるとところから始まり、今日において、高い基準、もしくは新しいタイプの作品の輩出が少ないことや、制作における修養法が消滅しつつあることなどを問題視している。150名のノミネートの中から選ばれた37名が参加し、日本からは佐藤ちさと、藤崎佐保里の2名が展示した。出品までの経緯としては、4月28日に指導教員の齋藤敏寿先生より Jan先生からのEメールを渡されたことに始まる。英文の翻訳に悪戦苦闘しつつも、その指示に従い、早速4枚の作品写真と、自身の経歴、また作品に関する説明文を200～400字程度で書き、英訳した後、Eメールにて返信、またCDにも焼き、郵送した。約一ヶ月半後、選考を通過したとの連絡から早速具体的な作品輸送の方法を検討し、数社の業者に問い合わせたが、選考いただいた作品だと、重量が5、60kg近くあることから、本格的な木枠梱包や、保険の問題から輸送に3、40万かかることがわかり、Jan先生に相談した結果、当初予定していた作品ではなく、送った写真の中からサイズの小さな別の作品への変更を許可していただいた。それから数日の間に作品のみの郵送ではなく、自分達自身で作品を現地まで運ぶ事、また齋藤先生にご同行いただけること、また学校側から航空代金をご支援いただけることが決まり大変ありがたくまた心強く思った。

15日からの展覧会に合わせ、前日14日に各自梱

包した作品を会場に運び込み、展示場所、展示台の高さ、大きさなどを企画者である Jan先生と相談の上決定した。業者に依頼せず、全て自力での運搬、設置であったため、その道中で作品が一部破損するハプニングにも見舞われたが、制作者が同行していたことで修復でき、展示には支障はなかった。私達が到着した頃には、既に各国から木枠や段ボールで梱包された作品が届いており、一部で現地の学生らによる設置作業が進められていた。15日午後6時より始まる予定のオープニングパーティー開始時間ぎりぎりまで設置作業は続き、設置にあたるスタッフの少なさを感じた。会場は真っ白い壁と高い天井、木目調の床に囲まれ、落ち着きの中にも温かみのある印象だった。参加したパーティーでは、出品者を始めとする展覧会関係者、SCAの学生、先生方で賑わい、お互いの作品を鑑賞、解説しあったり、各学校での授業体制や自らの状況などを紹介しあったりして積極的に交流を深めることができた。違う言語で自らの作品について述べるという経験は、その説明にあたり、的確な言葉を探して選ぶように始まり、なんとかして思いを伝えようと最大限に考え、全身を使って表現しようとしたりするその全てを通して、より自身の作品への理解を深めることができ、またそこから相手に作品を伝えることの難しさと大切さを改めて考えさせられたように思う。集まった作品の印象としては、人体の一部や動物などの具体的なモチーフを選んでいるものが多く、その中でも転写や線描によるイラストが施された作品も多数寄せられていた。生産される土の違いからか磁器のような透明感のある白っぽい作品も数多く目についた。素材の違いや、制作の背景、物事の捉え方の違いを、今回様々な視点で土と対峙する各国の現代作家たちとの出会い、交流を通してリアルな体感として感じ取ることが出来た。この貴重な経験を今後いかに有益に活用できるか、また今回初めて意識した、世界という新たな舞台も視野にいれての制作の展開をこれからの課題としたと思う。